

たったひとつの歌でさえ

市川 森一

「おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし」

「平家物語」が論(さと)している通り、

人生には、勝者も敗者もありません。ただ一度の人生にとって大事なものは、思い出。振り返ってみて、「いい人と出会ったなア」とか、「いいものを見たなア」とか、「少しは、他者のためにいいことをしたなア」とか、それは自分だけの、だれにも知らない思い出をどれだけ持っているかということが、つまりは、「いい人生だったなア」と思えることのように思えます。

みなさんは、たとえばお風呂の中などで、無意識になにか歌を口ずさんでいるようなことがありませんか？私は、むかしから「里ごころ」という童謡を口ずさむことがあるのですが、その歌を口ずさむと不思議に心が安らいできて、自分の全人生が素晴らしいものと思えてくるのです。

たったひとつの歌でさえ、人生を素晴らしいものにしてくれる。今回は、そんな思い出の歌にまつわる、一人の恩師のお話をさせていただきます。

それは、私がNHKの大河ドラマ「花の乱」の脚本を書いていた頃のことです。野口モモヨ先生という小学校時代の担任だった先生から、突然、一通のお手紙をいただきました。その頃、私はどうに五十歳を過ぎた壮年でしたから、モモヨ先生も八十歳に近いご高齢だったはずですが、しかし、万年筆の筆跡は実に若々しく、文体もしっかりしたものでした。

内容は、私の「花の乱」を毎週楽しみに観ているという励ましに続いて、五十年ほども前の、モモヨ先生が拙宅を家庭訪問してくださった頃の話がつづられておりました。

モモヨ先生の文章を追いながら、私の脳裡には、師範学校を出て市立諫早小学校に赴任したばかりの初々しい新米先生のお姿がよみがえっていました。余談ですが、のちに映画「二十四の瞳」を観たとき、高峰秀子演じる大石先生の佇(たたず)まいが、モモヨ先生に似ているなァと思ったことがありましたが、いま思うと、昭和二十年代の小学校の女先生方は、どなたも凜(りん)と背筋を伸ばして誇り高く、みなさんが共通の使命感と慈愛に充ちた雰囲気を持つ

ていらしたようでした。

私の実家は、諫早市の栄町という商店街の一隅で戦後はカメラ店などを営んでいたのですが、私の母は、戦時中から結核を患い、二階の奥の洋間のベッドで自宅療養をしておりました。当時の結核はまだ不治の病として世間から疎まれ、七歳の私や三つ下の妹は、母の傍に近寄ることも禁じられていました。幼い兄妹にとって母とは、レースのカーテン越しに垣間見る瘠せた可哀相なマリアさまといった印象でした。

家庭訪問をして下さったモモヨ先生も、カーテン越しに母と面談したと書いてありました。

モモヨ先生のお手紙には、その日の病床の母との会話が つづられていました。

「近頃、シンイチが私の愛唱歌を勝手に憶えて、遠くから歌ってくれるんですよ」

母は、モモヨ先生にそんなことを言ったそうです。

「どんな歌ですか？」と尋ねたモモヨ先生に、母は、自分は女学生のころから北原白秋の詩が好きで、病に臥せてからは、「里ごころ」の歌ばかり口ずさむようになってしまった、あるとき気づいたら、シンイチまでが歌うようになってしまったんです。あの子は音感がよかったです。

るですね、と嬉しそうに言ったということです。

モモヨ先生のお手紙には、病床で「里ごころ」を口ずさむ母への同情がしるされてきました。

お姑さんもいらっしゃる嫁ぎ先で長患いをしている肩身の狭さから、ご実家（森長おこし本舗）のことなど思い出されて歌っていらっしゃったのではないのでしょうか、と。そして、「お母さまと一緒に泣きました」とも。

そのお手紙の最後に、「森一サンは、憶えていますか？多分、お忘れかもしれませんが、書き添えておきます」

と、その「里ごころ」の詩を書いて下さっていたのです。

笛や太鼓に さそわれて

山の祭りに来てみたが

日暮れはいいや 里恋し

風吹きや 木の葉の音ばかり

母さま恋しと 泣いたれば
どうでもねんねよ お泊まりよ
しくしくお背戸に出て見れば
空には寒いあかね雲

雁（かり） 雁 棹（さお）になれ 前（さき）になれ
お迎（むか） ひたのむと 言うておくれ

それは、私が日頃、浴槽などで鼻歌まじりに歌っていたあの歌でした。ただその歌を、いつだれに教わったのかは不明のまままで歌っていたのです。もちろん、「里ごころ」という歌のタイトルも知りませんでした。

その謎が、モモヨ先生のお手紙ですべて氷解したのです。
さすがに、涙を禁じ得ませんでした。

薄倅のまま短い生涯を閉じた亡母への追慕の涙でもありました。しかし、それ以上に私は、五十年の歳月を越えて、一人の教え子のために、大昔の家庭訪問の小さなエピソードを忘れずにいて下さって、いまだ字が書けるうちに、それを書き送って下さった老恩師のご恩情の深さに泣かされたのです。

日本の教育を支えたのは、モモヨ先生のような教育者の存在でした。
「二十四の瞳」の大石先生もそうでしたが、

当時の先生は、生徒のひとりひとり背負った不幸を助けることはできないけれど、生徒と共に、一緒に泣いてやるのができたのです。生徒と一緒に泣いてやる。それが一番大事なことだということを、モモヨ先生のお手紙からふたたび教わりました。

いまでも、生徒の身になって親身に関わってくださいる先生方を私は多く知っています。
生徒のみなさんには、こうした素晴らしい先生方との出会いがあることを祈ります。

人生は、出会いです。

恩師との出会い、友人との出会い、よき伴侶との出会い、そして、たったひとつの歌でさえ、人生を豊かにしてくれることがあるということを感じておいただければ幸いです。